

演題番号：C4

誘発因子として細菌感染症を疑った多型紅斑の犬におけるワンヘルスの観点からの検討

○為近俊幸，為近佐智子

なにわ動物病院・兵庫県

1. はじめに：口腔内多型紅斑の犬から分離された病原体、特に *Streptococcus canis* について人と動物の共通感染症および薬剤耐性、すなわちワンヘルスの観点から検討した。
2. 材料および方法：犬、トイ・プードル、メス避妊済、8歳2ヶ月齢。頬部口腔粘膜に偽膜様潰瘍形成をともなう炎症性病変および下腹部に膿痂皮を認めた。口腔粘膜細胞診にて、細菌貪食像を伴う好中球浸潤および数種類の細菌を認めた。同部位グラム染色にて、グラム陽性球菌・短桿菌様およびグラム陰性短桿菌・フィラメント状桿菌を検出した。皮膚病変細胞診においては炎症細胞や細菌等は認められなかった。精査目的に口腔粘膜病変の細菌培養・薬剤感受性試験および口腔粘膜および下腹部皮膚病変のパンチ生検を実施し、治療目的に抗菌薬療法と動揺歯の抜歯および歯石除去を実施した。
3. 結果：細菌学的検査：*Streptococcus canis* (β 溶血性)、*Escherichia coli*、*Klebsiella pneumoniae*、*Bacteroides pyogenes* が分離された。病理組織学的検査：口腔粘膜・皮膚病変ともに多型紅斑/中毒性表皮壊死症と診断された。抗菌薬療法・歯科処置実施後、再燃なく順調に推移している。
4. 考察および結語：本症例は、臨床経過・各種検査結果等

から細菌感染症を誘発因子とする多型紅斑と診断した。口腔粘膜細胞診所見や人の猩紅熱様毒素関連性皮膚疾患を疑わせる臨床症状等から、 β 溶血性レンサ球菌を主体とする細菌感染症と推測した。犬の口腔内常在細菌叢の一つである *Streptococcus canis* は pyogenic group G 群レンサ球菌に分類される。人ではG群溶血性レンサ球菌による敗血症や蜂窩織炎が多数報告されているが、*Streptococcus canis* による敗血症例もある。犬においては心内膜炎や軟部組織感染の原因菌としての報告があり、犬の細菌感染症および公衆衛生上留意すべき病原体の一つと考える。分離された *Streptococcus canis* はアミノグリコシド系およびニューキノロン系抗菌薬に耐性を示していることから、今後更なる多剤耐性を獲得する可能性が懸念された。また口腔内から分離されたことから飼主との濃密な接触による人への感染も懸念され、ワンヘルスの観点から肝銘すべき一例であった。